

まだまだ Young Soldier です

西川 政一

古い言葉に、「烏兔匆々」とか「光陰矢の如し」とか申しますが、他方又「春日遅々」といって、月日のたつのは、まことに早いようで遅いものです。

私が一昨年初、突然の病のためぶっ倒れて、西宮の香雪記念病院に入院した時から、はや一年半を閲することになりました。ここで私も充分に身体をこしらえて、また、新たな働きを始めたのですが、病気が病気だけに、できるだけゆっくり急がないでやるようにと、どなたからもうかがうので、私もその点注意して慎重に慎重を重ねてやっております。

入院してからは、すぐさま退院できるものとタカをくくっていたところ、結局は去年の五月の連休前まで病院におられ、東京へ帰ってからも永野護さんのお世話で、赤坂の心臓血管研究所附属病院で三週間、み

っちり身体を検査していただいて、まあこれならば運動をやる方がよろうという許しを受けて、善福寺池のわが家へやっと戻りました。ちょうどこれから暑さに向うという頃でした。

平素はあまりにも丈夫だったものだから、病気というものを簡単に考えすぎていたようです。私としては合併直後の新会社の重大時に、一日も早く戦列に帰りたいかったのですが、なかなかいづくも短時日によくなるというものでなく、気はあせる、あせるけれどもお医者様は「ならぬ堪忍、するが堪忍」というわけで、私も意を決して Patient に徹することにしました。自分では判らぬが他人様が見れば今のところだんだんよくなっているかと思えます。私がひたすら Patient に徹することを念じていた時、新会社は二度の決算を行いました。その結果は

調べるためにまず三井物産と日商を目標にして、その実情を話してくれというわけなのです。

そこで私は二時間くらい面談し、いろいろ話したのですが、その間、日本の貿易商社というものが、世界の市場においてどういう仕事をやるのか、ご承知のように何らの天然資源のない日本の国土を、どうしてうまくそだてて行くか、そこに住みついている一億人の人間がどうして問題なく行けるかという努力、その努力を英国の連中が知るや知らずやということなのです。しかし、大いに日本人独特の努力、また、日本における商社というものがどういう役割を演じているかということと話したのでありますが、いうは易く、行なうは難し。人にいったことを自分がやらぬというわけには参らぬ。いったことは自分自身が進んでやらなければならぬことを痛感し、大いに努力をして行動したわけです。

われわれは、現代に生きているということにおいて、経済人として、いや、もっと広い意味での人間としての責任を負うております。その行手には益々困難が募るであろうが、将来の日本という国をもっともよくして行かねばなりません。その

時の流れというものも幸いしたと思うのですが、更に社員諸君が大いに頑張ってくれたおかげで、まずまずの成績、ひとまず肩の荷をおろし得たのでした。同時に私は考えました。すなわち、このまま私が元の通りであっていいものか、どうかという事です。ご承知のように、ここ一、二年というものはすべての企業が大いにハッスルして成長の伸びをできるだけ大ならしめようとしております。商社も同様、われわれの Competitors の考え方は非常に積極的であり、新会社としても、この際よほどの覚悟をもって臨まねばなりません。このことは私自身が痛いほど感じるのであります。なぜなら、私は今日に至るまでの十数年間商社の社長として仕事をやってあったわけで、勿論この間、まことに幸いなことに、天の時、地の利、人の和というものを得て、三位一体、よく今日の方向に進み得たわけですが、今後ともこれ以上の勢いでもって進むことはなかなか容易なことではありません。——私は Patient に徹した一年間、ずいぶん考えました。考え、考えあぐんだ結果、この際私は長年やってきた社長を退いて、自分としては口幅ったいい方です

もずっとよくなると思うので、その上で新しい方向にすべり出したいと思っております。

まず第一に、過去、長い間私にお寄せ下さいました御同情、御支援、御鞭撻に対し、心からお礼を申し上げると同時に、私自身、石田前国鉄総裁の如く、まだまだ Young

五十年昔の

ロンドン時代の思い出

吉田 秀太郎

Soldier ですし、また、故マッカーサー元帥のようにまだまだ消えて行くような人間でもありませんので、できるだけみなさんの御指示、御鞭撻を得て、二働きも三働きもやり抜きたいという気概に燃えております。どうかよろしくお願い致します。

私が一年志願兵の兵役を終え鈴木商店(当時栄町通)に復帰したのが大正五年一月(大正三年三月入社)西川文蔵支配人の前に軍隊式に直立不動の姿勢で只今帰りましたと報告した。西川さんは金子、柳田さんと互して三羽ガラスのお一人、お家さんが毎日ゴム輪の人力車で店に御出勤一同玄関へお出迎えした。盆暮のボナスはお家さんの前に一人づつ呼ばれ頂戴した。但し店にお預けで帳面にハンコを押して引き下ったのである。私は他の新入社員と一緒に布引のオリビヤに寝起き毎日徒歩で通

勤、勿論三食とも店で皆さんと同じものを食べる。当時は市電は熊内四丁目が終点、オリビヤの舎監は日野誠義、字名「歪兵衛さん」遅く帰館して風呂で大声をだしてよく叱られた。我々新入社員の毎朝最初の仕事は赤電(外国電報)の解釈でこれが一つの楽しみであった。全店常に和気あいあい活気溢れん許りであった。

私は香港支店在勤を経て、大正八年(一九一九年)ロンドン支店に転勤となり、大望の夢を抱きつつ郵船の困幡丸で赴任した。シンガポールには大久保先輩、安藤珍成さんがおら

れた。マルセーユには草加朝雄さん、リオンには村元さんが駐留、永い海の旅ロンドン迄四十五日余りかった。

なんといっても、日本は第一次世界大戦では戦勝国の一員、日本経済も旭日の勢い、ロンドンは金融と貿易では世界の中心地、その大波に乗



東宮殿下オックスフォード大学に於て、奉迎の少年少女に御会釈を給う。(今上陛下が外遊されたのは1921年)

って高畑さんがその敏腕を従横無尽に揮われ、鈴木の大黒柱としての貫録を遺憾なく発揮されたのである。金子翁願望の三井、三菱、鈴木の下三分論、いやそれにも勝る大発展を達成せられたのである。

当時川崎造船所の松方幸次郎社長がよくロンドン支店に來訪あり、常にシガーを薫し堂々たる立派さ、如才のない応接さ、ユーモア豊かなお話し振り、まだ髻髻として、我々の脳裡に残っている。あの当時アメリカとの船鉄交換のことで松方、金子、高畑三者間の相談でお忙しかったのでしょう。紐育支店には南治之助さん、米国通の柏萬次郎さんがおられた、柏さんは船鉄交換の話で度々ワシントン詣りに忙しかったと聞いている。

また松方コレク

日商岩井株式会社の パーティに参列して

今村 頼吉

日商岩井株式会社より新取締役会長西川政一氏並に新取締役社長辻良雄氏就任披露パーティの招待状を受取った。

「日時と会場」

▽二月九日 一四時—一五時三〇分

(大阪) 東洋ホテル(大淀の間)

▽二月十一日 一三時三〇分—一五時三〇分

(東京) ホテルニューオータニ(芙蓉の間)

▽二月十一日 一四時—一六時(名古屋) ホテルナゴヤキャッスル(青雲の間)

二月九日大阪市大淀区豊崎西通一丁目の新築の巨大な東洋ホテルに乘付けた。大淀の間入口にて先ず新社長辻良雄氏に祝詞と御礼を述べた。次いで橋本副社長等とも挨拶を交した。流石の大広間も超満員の盛況で立錫の余地もなかった。各卓上には豪華な盛花と山海の珍味がもりもりと山と積まれていた。美麗なホステス達のサービスでカクテル、ハイボール、燗酒、ビールなど飲み放題。オードブル、生野菜、鮮、サンドウィッチ等で満腹した。西川新会長の元氣な顔も見えた。小野三郎氏柳田義一氏と話していたら常務の梶原将軍が見えた。長い間快談が尽きなかった。宮口俊二郎、叶野健治、富永初造、野原貫司、山中喜之助の諸氏(辰巳会員又は日商社友会員)と酌み交しながら快談した。貞広副社長、西村正己重役、関連事業本部長中島儀一郎氏(前神戸支店長)ともヤーと挨拶を交した。辰巳会員(藤沢次郎氏)の令息信郎君は現在木材本部長の要職に在り。小野三郎氏に紹介していろいろ話した。時の過ぐるのを忘れていた。兎に角かかる盛大なカクテルパーティに参列したのは初めてだった。今後共新会長西川政一氏と新社長辻良雄氏の益々御健康と共に日商岩井株式会社の愈々御発展あらんことを衷心より御祈り申し上げます。

(四四年二月一〇日記す)

ジョンとして後世有名になった絵画は、その頃パリやロンドンで蒐集されたものだと思う。

他方永井老台は一騎当千の一青年闘士としてロシアのペトログラードに単身駐在、店のため国のため大活躍に尽瘁され不滅の大功績をたてられたことは已に御承知の通りである。

私はロンドン支店に大正八年末から同十二年七月迄在勤、この時期には小川、間室、宮口、小野、清水、鈴木、益子、相原、木村、助野、実、作道、瀬脇、内山、今城、三浦、織田、二階堂、本、堀田、三宅、山内等々誠に多士済々、ハングルクには金子、その他日本よりの訪客万来、常に賑やかなことであつた。



高畑さんが住んでおられたロンドンの家

右のような中に高畑さんが千代子夫人をお迎えになった。鈴木岩治郎御主人が千代子令嬢と共に西川玉之助翁夫妻を滞同、はるばる来倫せられ、パリにて式を挙げられるにつき我々数人ロンドンから歓迎かたがたお手伝いにパリまでお出迎えに出向いた。式はホテルにて厳肅裡に行なわれ、そのあとの祝宴の席で岩治郎御主人が三味線がないままに御自分で手拍子をとりながら、常盤津のお目出度いさわりの一節を洩いノドの名調子でお唄いになったことは誠に印

象的で私の耳底に今なお残っているところである。

高畑御夫妻の新居はロンドンのハムステッドヒースにある豪邸であつた。我々若い者はよくお邪魔して高畑さんお命名お自慢の有名なツーハインドレッドと称する焼きそばを御馳走になった。お正月には全員祝賀に参集し邸内のテニスコートで一同撮影した(この写真は先に「たつみ」に掲載された)。何分日本経済華かなりし頃として日本大使館、駐在武官、銀行、商社、船会社などの代表者社員等恐らく三千人以上に上り、誠に殷盛を極めた。三井物産の向井忠靖さんも支店長として采配を揮っておられた。

さて当時私の仕事は満州の物産である大豆、大豆油、その他落花生、落花生油、ゴマなどの欧州方面への売込みである。何分神戸本店や大連支店の力強いバックがあったので東西相呼応して自由に活躍が出来た。大口の買手としてはレバリーブラザーズ、ヂャーゲン、バンデンバーグ、イーストエシアティックでその他大陸方面には中小の買手が散在していた。

稍々あとになって合同油脂(長崎英造社長、久保田四郎専務)の製品

である硬化油も市場に紹介され売れ行きも良好であつた。

こういう好況の中でここに特筆、後世に記録として是非残しておきたいことがある。それは従来大豆油の輸出は石油の古缶に入れて積出したものだが、その後一步を進め欧州航路に就航している日本船のディーパートンクを利用して積出されることになった。ところが鈴木商店では金子高畑御両台の発想によると思われるのだが、神戸製鋼所の一ブランチであつた播磨造船所で外航タンカーの嘴矢ともいうべき、橘丸、満珠丸、千珠丸の三隻(各六千吨級、当時としては最大型)を建造せしめ、各船に大連から大豆油を満載し欧州へ積出したのである。それで大豆油を一口二千屯以上の買手に対しては、本船のドラフトの許す限り、欧州のどの港へでも廻航し買手希望の岸壁に横付けし陸上タンクへ本船のパイプを直結して流し込んだのである。計量も簡単に行なわれ目減りも出て来ない。誠に画期的な一大新機軸を産み出し、大量バルク輸送の先駆として実に欧州市場を圧巻したのである。而も本船は大豆油全量を荷揚げしたあと、その儘バラストで日本へ帰航するのではなく、帰途ペルシャ

砂鉄からの一貫生産...

高周波・特殊鋼・砂鉄銑・バイト

 日本高周波鋼業株式会社

取締役社長 山野上重喜

本社 東京TEL (231) 6761・支社 大阪TEL (362) 8376
駐在所 名古屋 事業所 東京・富山・八戸



日本グリース株式会社

取締役社長 森 知 巳

本社 大阪市北区堂島浜通1丁目25番地の1
(新大ビル)

電話 (344) 8951 番 (代表)

工場 神戸・下関
営業所 東京・名古屋・大阪・神戸・広島・福岡

日染株式会社

本社 東京都千代田区丸ノ内2の6 (八重州ビル)

工場 京都市北区小山南上総町53

特許ネオ浄化槽

辰巳興業株式会社

取締役社長 山 崎 敏 明

神戸市生田区栄町通2丁目21番地
電話 (078) 32 - 0655 (代)



新日本金属化学株式会社

社長 岡 田 傳 次

京都市右京区梅津中倉町11の1



太陽チタン株式会社

社長 古 久 保 末 雄

京都市右京区梅津中倉町11の1

のバスラ港に寄港し、日本海軍御用の燃料用重油を満載して徳山燃料廠へ納入したのである。それから直ぐさま大連に廻航しそこで苦力を大量使役し化学的清掃を加えて船艙の完全なる掃除を行ない、再び大豆油を満載し欧州市場へ運ぶということをし、三井、三菱と雖もただ啞然として拱手傍觀あるのみ、鈴木の大偉大さの一つとして大なる誇りを感じずにはいられなかった。天下三分論などなんのそのと熱い意気に燃えていたのであった。

さて前記三隻のタンカーを建造した当時一小播磨造船所が五十年後の今日、只今の石川島播磨と発展合併、彼我ともに許す世界有数の一大シッビルダーにのし上り、最大型の三十二万六千噸級を造り終ったのも東の間、こんどはなんと一隻四十万噸に垂んとする超々大型船の建造に取り組んでいる。転た今昔の感を禁じ得ない。蓋しこれがタンカーとしていよいよ経済的にも技術的にも最大限界に來たのであらうことが伝えられている。

次に大正九年(一九二〇年)日本の綿糸布の最大の御得意先である支那と印度から同時に不買ボイコット

を喰らい、輸出が止まり、大滞貨となった。それで日本紡績聯合会より鈴木商店にこれが捌け口はただバルカン方面あるのみとして協力の要請があり、ロンドン支店の私に出張命令が下り急拠旅装を整へ見本を携行出立した。イタリーのミラノを振り出しにベルグラード(ユーゴスラビヤ)、ソフィヤ(ブルガリア)、コンスタンチノーブル(現名イスタンブール・トルコ)、アテネ(ギリシヤ)、ポートセッド及びアレキサンダリア(エジプト)などを巡歴した。もとより綿布関係については、何等の連絡知己もなく、専ら各地の商業会議所を頼りに乗り込んでいった。加え第一次世界大戦直後のこととして政情交通機関など未だ復旧なく苦労不安が多かった。更にこの辺一帶は古くからマンチエスター商人が深い根を下ろしている地盤であるので仲々一朝一夕に切り崩せない。而も彼等の遣り口は常に金融的技術的な援助協力を提供し万事徹底している。即ち小売商はなんにもせず、ただじっとしておればそれぞれの地方に適合した立派に出来上ったものが店の中まで持ち込まれ、代金は品物が売れてから支払うという結構な条件である。これに對し我が日本の

方は小さい見本により契約を結び、直ぐ買手が信用状を開き、現品は二ヶ月位かかって漸く日本を積出しどころの便利な港で引き取ってくれという気の永い調子、マンチエスターものと比較しまるで問題にならないきつい条件、大体信用状の何たるやを知らないしまたそれを開けるような信用もない相手である。しかし説得これ努めたが、結局残念ながら直ぐさま商談成立という訳にはいかなかった。蓋し止むを得なかった次第である。しかしその後徐々にながら地方の輸入商を通じ日本の品物が動いたとのことである。どんな商品でも新しく市場を開拓するには骨も折れるし犠牲を覚悟でかからねばならぬものである。

私のこのバルカン旅行中に左の二つのハッピーニングに遭遇したのである。これは今日まで発表せなかったのですが昨年九月のロンドン会の席上で初めて聞いて頂いたもの、この際辰巳会の皆様にもと思ひ摘記した次第である。

その一は、ブルガリアのソフィアに行ったときホテルに入ると、日本人が大勢このホテルにとまっていることを聞かされた。早速刺を通じて最初にお会いした人は実に馬淵陸軍大佐であった。このバルカン方面で

はその当時日本人に出会うことはメッタにないことであつただけに、余りの突然のことで私の驚きは非常に大きかった。また同大佐も突然私が飛び込んで目の前に現われたのには愕かれた様子であつた。ホテルの最上階の全フロアは見渡す限り我同胞許り、話を承って見るとそのはず、第一次世界大戦では日本帝国は堂々たる戦勝国の一員、戦後の国境制定委員として陸海軍中、少佐の選良の集団で馬淵大佐が団長として駐留中であつたのである。同団長は今から思えば大東亜戦争後の米国のマッカーサー將軍の小型ともいふべく、当時としては唯一の司令官としてえよう。それを聞かされて二度びっくり、早速私のパスポートにサインをお願いするやら、私のソフィア滞在中コンマンダーの呼称を許されるやら、ホテルの前庭に待機する日の丸の旗をたてている数多くの自動車(それにはブルガリア兵が運転手として乗っていて私を挙手の敬礼で迎えてくれる)の自由使用、私のホテルの費用一切はサインでOKなど種々公私共に遠慮なく恩恵に浴させてもらった。蓋し日本委員団の駐留費用は全部敗戦国の負担であつたこと

は当然のことであった。またこのバルカン一帯は永年いじめられていた傲慢なロシアに打ち勝った日本であるということ、日本人はとても歓迎され好意をもたれたものである。地中海沿岸の港には日章旗をヘンボンと翻している我が帝国軍艦の英姿が見られたもので、戦勝兵はからだこそ小さいがそれでも立派に力強さが現われていた。矢張り戦争には勝つべきだと深く感じた。

顧みるに私が生まれてからのこのかた随分戦争が多かった、先づ明治二十七年の日清戦争に始まり、北清事変、続いて三十七年には日露戦争の勃発、四十三年には韓国併合、大正に入ってから第一次世界大戦、シベリア出兵、昭和になって満州事変、上海事変、支那事変、悉く連戦連勝ここまではどうやら成功した。ところが第二次世界大戦、続いて太平洋戦争（昭和十六年十二月八日ハワイ真珠湾奇襲）、そしてこんどは二十年八月広島と長崎に原爆を蒙り、遂に八月十五日の停戦布告となり万事窮し大敗を喫した。マッカーサー將軍の本土上陸となり、息の根を完全に止められたのである。そして満州、関東州、樺太、台湾を一举に取り揚げられ、韓国は二分されたが日本か

らはなれて独立国になった。結局五十年間に貴重な血と肉で奪い取った領土を一朝にして奮い去られ、またもとの極東の一小孤島の李阿弥に帰してしまつた。

正に敗者の悲惨なる姿である。私は前記日本が戦勝国としてのソフィヤに於て晴ればれとする優越感を味つていただけに日本に於けるマ將軍司令官のありかたは私としては人一倍深刻に身にこたえたのである。武装解除―新憲法―戦争放棄―平和保障に絶体絶命である。二度と繰り返してはならない大悲劇である。

その二つのハッピーニングは今から思えば全く昔のお伽話か夢物語りみたいなものである。それはソフィアに滞在中馬淵大佐の紹介でブルガリア国のある代議士に会い何か鈴木商店としての仕事があればと種々話を承った。その中にその代議士はトルコのケメルパシャと昵懇であり目下トルコでは国内闘争をやっている最中だが、ここ数年間トルコ産の亜片が輸出禁止になっていてエゼアン海岸の倉庫に莫大量のストックが充満している。同代議士は早速ケメルパシャに直接交渉して支那なり何処なりへの輸出許可を取ってあげるからコンスタンチノールへ行き戦線ま

で白旗を掲げつつ行けばそれから先はケメルパシャ軍に護衛され王宮にゲストとして歓待されるであらう。君のバルカンみやげとして立派なものであると誠に親切なお話、血の気の多かつた当時の若い私、コ市に勇んで乗り込んだ次第、駅へ着くとコ市マンダーヨシダと大声でどなっている。私は早速ホテルに案内された。当時は話に聞いていた通り市内一帯物騒然銃声がホテルからきこえていた。然るところ驚いたのはコ市の日本大使館から連絡があり私がケメルパシャに会いに行くとの情報

が已に入っており、幾度も執拗に思い止まるよう強い要請であった。私も冷静に熟慮の末身の安全の保障もない儘、遂に残念ながら、ケメルパシャとの折角の会見の壮挙(?)を思い止まったのである。今にしてこのことを思い浮べて身の引き締まるのを感じる。もし強行していたら果してどんな結果になっていただろう。銃弾に当たって斃れていたか、それとも私の一生を一変するような大展開を招来したか、スリリングな話題を残すようなことになったかも知れない。ルーマニアのブカレストへも足をのばす予定であったが相憎くここもロシアとの争いで黒海方面政

情不安のため取り止めにした。

斯くして私は大正十二年七月神戸本店（海岸ビル）に帰任した。九月一日の大震災の一大惨事が勃発、直ちに帝都復興院（後藤新平総裁）が急設せられ、英米カナダより木材鉄板類を緊急救済物資として大量に調達輸入することとなり、その仕事のお手伝いとして一ヶ年許り御奉公した。

そのあと神戸本店雑品部に復帰し鈴木商店が米国のリッチフィールド石油会社の日本総代理店として話がまとまった直後、即ち昭和二年春に鈴木商店が閉鎖の大悲劇に突入したのである。誠に悲憤の極みでこんな口惜しいことはない。何年経っても拭い去ることの出来ない深手であることは私だけではないと信ずる。それから私は神戸製鋼所代理販売部を経て日商株式会社に入り、リッチフィールド及びユニオン石油会社のバックを足場として私の第二の人生というべき多彩な石油時代となったのである。

最後に曾てロンドンに在勤していたもの相集まり高畑御夫妻を中心にしてロンドン会を結成した。その第一回は昭和三十四年十一月二十五日東京で開催、小金井でゴルフ、夜は赤坂の赤坂飯店で小宴、誠に楽しい

落合さんと麦粉部

秋元鷹男

今秋は落合豊一さんの十三回忌に当りますので、爰に一文を草して故人を偲び、又故人と共に在職した麦粉部の事どもを書き添え度いと思ひます。

「入社当時の麦粉部」

私の鈴木入社は大正八年の春でした。一次大戦は前年秋に停戦とな

り、早くも船舶、鉄材、薬品などが大きく値下りしましたが、八年に入ると再び戦時以上のブームが興って九年の春迄続いて居ります。

宇治川の本店仮事務所は玄関左手大広間の中央通路を挟んで東側に米油、雑穀、樟腦、積出、雑貨、麦粉そして西側に満州、燐寸、冶金、木材、鉄材などの机がずらりと並び、人の出入が激しく、活気に充ち充ちて仕舞でした。

私の配属された麦粉部は主任が篠原正次さん、内地係が岡本弘紀、真鼻貞吉、佐脇静夫、富川頼、中安頼治の諸氏、それに外国係が中川宇市氏と私と云った小人数でした。

篠原さんは一見物静ですが鹿児島特有の激しい気象の人でした。鋭い洞察力、強い実行力、確乎とした統率力を備え、肚が据って、大きな仕事を成すに適しい非常に優れた人物でした。小柄な瘦軀、寡黙、冷徹、古武士に似て冒し難い威厳がありま

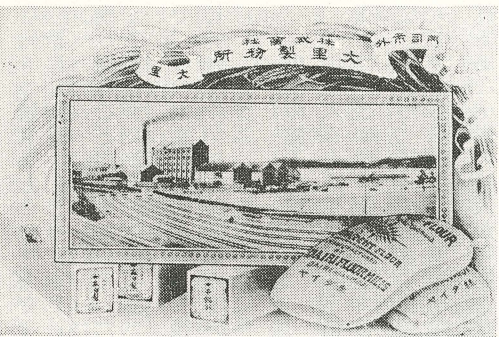
した。持病の神経痛に悩み、厚手のシャツを着込み、特製の大回転椅子に仰向き加減に背をもたせ、膝を毛布にくるんで、時にパイプを薫らし時に瞑目し考えに耽っている姿をよく見掛けました。

もともと鈴木は大里製粉所を直営して、麦粉の国内取引では一方の雄でありました。それで私の入社する前年と前々年に大量の内地麦粉を欧州へ向けて輸出し大きな利益を挙げていました。

引続き八年も戦後景気で麦粉の内地商売は非常に活気を呈して居りました。之に反し外国小麦は産地品薄で、僅かに豪州から二等品数万屯を輸入したに過ぎません。二等品と云っても名ばかりで黴臭い虫喰の古小麦が主でした。

「対欧輸出始まる」

その頃食糧不足の欧州へ極東から米、油、大豆などが盛に輸出されて居ましたが、九年の春、遅播乍ら満州小麦に順番が廻って来ました。高畑さん指揮の倫敦支店の大活躍によって大量の注文が取れたのに呼応して大連支店では沢本嘉春、田中実の諸氏が活発に小麦の買附を進め、大連港へ差向けた帝国、国際、川崎など八千屯級の貨物船四十数艘に満載



大里製粉所のえはがき

茲に末筆ではありますが、先ず高畑御夫妻の御健勝を祈り、併せて鈴木家、金子、西川、柳田各家御一統様と辰巳会各位の御隆昌と御長寿を祈念する次第であります。尚ロンドン会開催毎に高畑御夫妻から物心共に暖かき御高配と御援助を頂き、その御芳志に対し一同深謝致しておる次第で、ここに申し添えさせて頂きます。（昭和四十五年四月記）

（明治二十五年生）